

報 告

公開講座抄録

The Unknowable

Psychic functioning outside verbal thinking and implications for psychic change

不可知なもの

—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化—

(2018. 11. 11 於：京都テルサ)

講 師：Rudi Vermote（京都大学大学院教育学研究科客員教授/
ルーベン大学精神医学センター部門長）
通 訳：ダーリンプル 規子（中部学院大学准教授）
司 会：松 下 姫 歌（京都大学大学院教育学研究科准教授）
挨 拶：岡 野 憲一郎（京都大学大学院教育学研究科教授/
臨床教育実践研究センター長）

ご 挨 拶

岡野憲一郎（京都大学大学院教育学研究科教授 臨床教育実践研究センター長）

皆さま、こんにちは。今日は非常にいいお天気で、このように沢山の皆さまにお集まりいただき、本当にありがとうございます。今日は台風が来たらどうしようというふうに思っていたのです。こんなにいい天気になって、このような日にベルモート先生の公開講座を開催することができまして、大変嬉しく思っております。最初にルディ・ベルモート先生のご紹介を簡単にさせていただきます。ベルモート先生は、ベルギーの訓練精神分析家です。精神分析ベルギー協会の元会長でもあり、またルーベン大学、ベルギーのルーベン大学精神医学センター部門長でもあります。精神科医の先生です。これまで精神分析のなかでも特にビオンの業績について、多数の著作や論文を発表されてきました。このパンフレットをご覧になった方は、そこにもうちょっと詳しく書かれています。先生は、国際精神分析学会誌というものがありまして、非常に著名な学会誌なのですが、そこの編集委員もなさっています。少し前から存じ上げているのですが、実際にお会いすると非常に優しいというか、ちょっと恥ずかしが

り屋で、ここは通訳しなくてもいいですから（笑）非常に含羞のある方というふうに私はとってもいいと思うのですが、本人は照れ屋であることを絶対認めようとしないというところが、またいいのです。非常に日本通で、お父様が柔道家だったそうです。それもありまして非常に日本のことにお詳しい、私たちよりもずっと日本のことに詳しいという印象をもちます。今日は、ある意味ではすごく難しいテーマです。この講演が、皆さまにとって大きな知的刺激となって、学びの機会になることを祈っております。それではこれを持ちましてご挨拶の言葉といたします。

松下：岡野先生、ありがとうございました。それでは改めまして、講師のご紹介をしたいと思います。
ルディ・ベルモート先生です。それから通訳には、中部学院大学の准教授でいらっしゃいますダーリンプル規子先生にお願いしております。申し遅れましたけれども司会の松下と申します。よろしく願いいたします。それではベルモート先生の講演をお楽しみください。（拍手）

第1部 講演 不可知なもの—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化—

ルディ・ベルモート（通訳 ダーリンプル規子）

今日はこのような天候の良いときに、こちらの方に参加くださって 私の講演を聴こうとしてくださって、どうもありがとうございます。私は、今日は京都大学大学院教育学研究科で講演をさせていただくのを、本当に光栄に思っております。私はビオンの考え方というものにすごく興味を持っているのですけれども、それがすごく日本のいろんな考え方や思想とつながっているところがある、というふうに思っていて、すごく興味を持っています。そここのところを今日は話してみようかなと思っています。

導入としての質問に入りたいと思います。最初に芸術なのですが、芸術というのは、本当に沢山の自分のなかの質問を湧き起こさせます。まず感情としては、驚きとか魅惑させたりとか、感嘆させたりというものがあるのです。今日私が話題にしたいのは、その私たちのところが動かされている時というのは、例えば写真とか絵画とか音楽とかありますけど、そのときに何が私の中で起こっているのか。沢山の芸術作品というのは、美しくて、そして創造的なのですけれども、動くことはありません。

二つ目の質問です。恋に落ちるということはとても不思議なことで、ふたりの人格が好みとか、美しさとか知性、性的な魅力などを根拠に、お互いに魅き付け合っていくのですけれども、私たちが愛と呼んでいるこの特別な感情というのは、何かそこは別のような気がします。それは何でしょうか。

そして三つ目の質問です。私は心理療法家です。35年以上、精神分析家として、色々なご病気を持っていらっしゃる人たちと関わってきました。そのなかで、その心的変化をもたらすもの、患者のなかの心的変化をもたらすものは何かについてということは、不明な点が沢山あります。私たちが患者に差し伸べたいと希望する、この特別な体験というのは何でしょうか。これは先程の質問に対するよくある反応、答えですね。芸術に出会うと私たちはそれを必ず理解しようとしします。この芸術家は何をそれで表現しているのか、その人はどのスタイルに所属しているのか、現実とその芸術作品との関係はどんなふ

うなのだろうか、そこで意味はどんなふうに表示されているのか。でもこれが、私たちのところを揺り動かすわけではないのです。二つ目の恋愛関係ですけれども、私たちはしばしばシンプルなストーリーを自分の中に描いて、そこに愛する人を当てはめます。そしてそのストーリーに沿った未来というものを見ようとして、それは往々にして魔法と願望が消滅するお粗末な結果になったりもします。三つ目です。心理療法では、多くのセラピストが、過去の出来事との因果関係を考えて、現在の問題とのその因果関係を見つけるために、色々な概念や考えや記憶というものを使用して理解しようと努めています。患者の人生において起こったことが、今現在の患者たらしめているということで、そこにつながりを見て、それについて患者に解釈をする、で、そこで患者が変化するというのを希望するわけですが、これは滅多にはそうはなりません。変化はこのようには起こっていかないということですね。そのため私たちは、こういう論理的なものとか因果関係を考える理由とか、そういうものが、私たちの質問に答えるにはちょっと頼りない道しるべ、と思うかもしれません。それと、今いったものとは別の方法、アプローチを考えてみたいと思います。今の例のように、芸術や愛、心理療法での変化の大部分というのは、意識のコントロールの外側の別のレベルで起こる。そのことが起こると、私たちの態度というのが変化します。それは、ただ一部のみが現実と関係しているのです。この不思議なものを私たちは、ここらと呼びます。私は、今日のこの講演で、ここらというものを、自分の意志の外側の、自分たち自身の中で自然に起こる活動、というふうに定義をします。つまり主に無意識で、不合理で、予測のつかない方法で、つながりや表現というものをするということですね。フロイトは、このような精神機能の特徴を、自分自身の夢を分析することによって正確に示しています。彼は置き換えや圧縮というものによって、連想したものの機能というものを発見しました。そして 100 年以上もの間、誰もこれを反証したことがありません。もうひとりメラニー・クラインですが、メラニー・クラインは、ここらというのは、隠れた地下の奥にある、昼も夜も続くファンタジーというものの流れで、全ての精神活動の基礎だというふうに表現しました。このファンタジーは、性的であったり攻撃的であったり、あるいはアタッチメントのそういう衝動から心的表象というものを作ってつながっていくものです。この大部分が、未知の精神の内的世界、つまりファンタジーが、私たちが現実を知覚し、対処する方法というものを管理しています。この無意識の自然に起こってくる活動というものは、理論的な思考よりも進化的には古いものですが、知覚とか感情を伴った精神的機能のすごく強力なものとなります。ジークムント・フロイトとメラニー・クラインは、この無意識の精神機能というものを当然のものとして、機能そのものというよりも、その内容の方に焦点を当てていました。しかし精神病とか自閉症、あるいは早期の子供時代のトラウマとか、境界性パーソナリティ障害というものにおいて、この機能自体が働きません。そこでウィルフレッド・ビオンが、この自然な精神機能についての実質的な哲学的なモデルで、精神機能が障害を起こしている患者の治療において、心理療法家が使うモデルで、それを一番言い表した最初の人です。上の方は後から言いますが、このスライドの下の方を見て下さい。まず何かがこう来た時に何が起こるのでしょうか。私たちは何かがわかりません。わからないので、その不可知なものっていう名前をつけているわけですが、そのなかに β (ベータ)、 β 要素っていうものがあるのですが、それは精神的な働きというものはまだありません。そして α (アルファ) 要素、それはちゃんと精神的機能というものがあります。その精神的な機能にはまだなっていない β 要素と α 要素の間には、 α 機能という

ものが働いています。そのためには、母親とかあるいは養育者という存在が必要です。例えば赤ちゃんから来た β 要素というものです、どんな風にも変形していないそのままを、まずは受け取ります。そしてその養育者、母親は、それを自分の中の α 機能を使って、そして消化して、それを返します。最初は必ず養育者を通らなくちゃいけなかったのが、次第にこの赤ちゃんが β 要素から α 要素に、自分自身で変換していくことができるようになります。例えば赤ちゃんが、お腹が空いたって感じるのです。それはお腹が空いたってというのはわからないので、とにかく赤ちゃんには圧倒的な何か、って感じるわけですね。で、それは大変だって感じになるのです。お母さんを通して、自分がちゃんと、「あ、そうだったのだ」って思えるものにして返してくれる。この β 要素というものを α 要素に変えていくというこのものを、**projective identification**、投影性同一視といいます、精神分析ではですね。じゃあこのとき、お母さんの中で何が起きているかということなのです。お母さんの状態っていうのは、とてもこう穏やかにしていて、それをビオンは **reverie**、もの想いと名付けました。このレヴェリーというものは、自発的に柔軟に動くものなのです。これはヒュームという哲学者が最初にいっています。このレヴェリー、もの想いということに関しては、クライニアン、クライン派ですね、の人たちは、これをコンテイメントと呼んでいます。このコンテイメント、つまり受け取るということなのです、しっかり抱えるということなのです。それっていうのは、このセラピー、精神分析の中のセラピストの方の姿勢でもあります。大事な姿勢ということですね。例えば、最初にすごく不安を抱えている患者がいて、その人が、そしてそれを私たち治療者も感じるわけなのです。それを返す時に、患者が、あまりにも怖くてそれを受け取れないという形ではない、彼らが持ち堪えられる形として返す、ということをしします。これは、私たち精神分析だけでなく、神経科学のなかでもそれが見つかっています。ビオンが思考と呼んで、また私たちがメンタライジングと呼んでいるこのような精神機能というのが、神経科学において発見されているということですね。そのことはとても興味深いことです。先ほどの神経科学のなかで、実際にその見るとか音楽を聴くとか話すという活動のときに、**fMRI** で、ちゃんと見える、神経回路網が可視化されるようになっているのです。人が何もしないと、何も考えないということがあっても、そこには実はとても強い脳の活動っていうのが見られた。で、これはある種の音と解釈されましたが、それが実際に脳の止まることなく働いているモード、これをデフォルトモード機能といいます。そういうもので、自発的な活動であって、これが前頭前皮質腹内側部というところと、後帯状皮質というところのネットワークに主に位置していることがわかっています。私たちにとって興味深いのは、このネットワークというのは、思考と表象を表すことで、自発的なつながりを作ることと関係していて、それは **mind wandering**、こころを漂わせる、というふうに呼ばれています。それは無意識の思考で非常に大切で、例えば、夢見ることとか創造性につながりがあります。その関係性の問題のように多く複雑性があるときに、この無意識の思考というものが、考えるということが、論理的で言葉から成る、考える、あるいは推論ということよりもかなり効果的です。もし考えるという時には、そんなに難しくないことだったらすごく効果があります。ところが例えば人間関係など、とても複雑なものになっていくと、より無意識的なものが働き出します。その脳に関する論文のなかに、カール・ハールト・ハリスという方がいらっしゃるのですが、その方が、フロイトのエゴ、特にその中の無意識の大部分のこととつなげて、これがデフォルトモードネットワークと呼応しているということを主張しています。(きちっと訳せるか

どうかわかりませんが)神経の中の最初のところに作っているところに、その無意識の大部分というところがあるということです。

私たちの最初の三つの質問のところに戻っていきたいと思います。芸術と関係性ということと、それから心理療法ですね。これらは現実や論理的なものを土台に理解されるものではなくて、こころ、つまり意志の外によって管理され、別の言葉でいえば、ファンタジーとか夢のように、自然で自発的な思考プロセスによって管理されるというふうに言えると思います。ここまでちょっと見てきましたが、まだまだ答えにはなっていません。そして、今からその不可知の精神機能の領域というところに入っていきたいと思います。

私たちはみんな、私たちを満足させる、あるいは静けさを与えてくれて、あるいはこころの平安をもたらしてくれる何かというものを探しています。それはまるで私たちが自分の中の何か、それを回復しようと、またそれとなく経験しているもの、そういうものとの接触を失ったかのようです。この「それ」というもの、あるいはどんな風に呼んでもよろしいのですけれども、これが恐らく、先程から言っている芸術において私たちを揺さぶるものであったり、恋愛状態のときに見つけたものであったり、心理療法において変化を引き起こし続けているものと呼応していると思います。いくつかの精神分析的モデルもそれに言及しているように思います。まずフロイトは、厳密な意味でいくと、フロイトは夢というのは無意識ではなくて、原型を留めない投影だけであって、その夢の *navel*、おへそということ。まあトンネル。私たちを別の世界へ連れていくことができるのだと仮定していました。フロイトは、ル・アンドレアス・ザロメへの手紙に、私たちは、わざと自分の目を見えなくして、そうすれば見えるようになるのだということを示唆していました。ウィニコットは、自分と外部との接触を断たれた自己ということを行っています。それはもっと本物の自己、真実の自己というもので、表象ではなくてむしろ、いのちに活力を与える経験である真実の自己というもののなのです。それを提案しました。これに到達するためには、本当に深く退行していくことが大事なのだと思います。ラカン、無意識の内容というのは表象とかイメージというものではなくて、特定できず、活力を与える特徴を持った、活力を与える特徴を持った、布置の一種だというようにいっています。そしてそれを私たちは見ることはできない。それは表象ができない、それを対象 A といいます、対象 A の意志によって投影されていく。そして欠乏とか願望というものを私たちに呼び起こすのだといっています。今それぞれの人が、この不可知なものをどんな風に言っているかということを行いました、ビオンについて私はかなり勉強しています。彼が思考における変更と呼んでいる、思考や象徴に関するモデルというのが、ゴールには到達しないのだと理解しました。それは実際に既に起こった経験の表象のレベルに残っているものです。けれども彼は、真実の継続したものというのが起こっているのだということです。意識のこのレベル、考えることのできるレベルでも、もちろん大事な体験は起こっているのです。その下の言葉にはできないところのものがすごく大事なわけです。それは表象できるものではないので、彼はそれに名前を付けました。それは O (オー) という名前です。これは恐らく、起源、*origin* から来ている O だと思います。知における変形っていうだけじゃなくて、この O における変形が起こるわけです。ビオンは、そのことを知ることはできない、そのことを話すことはできない、といっています。ビオンがいつているのです。ビオンはそれを語ることは不可能である、まるでジャガイモに歌を歌わせることができないように、という風に

言っているそうです。つまり、私たちが知的に捉えようとする、そのことは直感的に接触するという能力を破壊してしまうわけですね。ビオンは、この知的で理性的なアプローチというものをカメラに例えるのですが、明かりが漏れて、明かりが漏れたが故に無駄になるカメラ、昔の写真、フィルムというものと比較しています。このOの領域で、私たちが患者と接触することができると、精神的変化というもの長く続くものにもたらずことができます。それはいわゆる **transformation in O**、Oにおける変形というもので、これが精神分析を終結に向かうことを可能にするものです。それ故、そのようなOにおける変形というものは、精神分析の究極の目的です。それは分析において、ビオンによると4回のうち1回ほど起こるというふうに言われています。大事なことは、セラピストがそのことを閉じてしまわないことです。逆説なのです。それは、ただし自分から欲するということはできないということですね、これはただ、できるたったひとつのことは、自然に起こるように、状況を最大限に活用するということです。このことから、分析家は自分が何かを欲するのではない、理解をしようとするのではない、非・興味という状態にいるということを訓練しなくてはいけなくて、ビオンの言葉でいうと、欲することなく理解することなく、記憶することなく、統一することのないという状態で、ビオンはこのことを信心、つまりただ受容するということだと思うのですけれど、の状態というふうに呼んでいます。それは宗教ではなくて、心理療法的な方法として最大限にオープンな状態、ということです。ビオンは言っています。Oについて話すことも表現することもできません、ただそれは体験して、なるということができる。実際ビオンというのは、神秘論者と同じ問題に直面したと感じていて、言葉で表現することができない体験を伝え、神秘論者が話すような、統合した超自然的な経験というものとは違って、治療の方だと精神的な変化の治療的な体験をどんなふうに伝えるかということにすごく苦心しました。ビオンが今まで使っていた幾分かの科学的な言葉の代わりに、彼は、治療の見通しをよりよく表現することを見つけて、その神秘論者の言葉に近いけれどもちょっと違うということですね、治療の方の言葉として変化させました。これが私にはエッカートの神格化ということにつながっていきました。エッカートは言っています。これはとても日本の考え方と似ていると思うのですが、神について話すということは、それは神ではない、と言っています。エッカートは実際には、晩年のビオンが精神分析や心理療法の中で言ったことと同様の状況を提案しました。つまりポヴァティヴマインド、**poverty** というのは貧困ということなのですが、ここでいうのはもっとポジティブな意味で、欲望を放棄したところ、というか無心のところっていうのですかね、そういう感じのことを言いました。ビオンもその不可知な精神的な現実というものを、ミルトンの失楽園の、役に立たない形のない、無限の空間というものと比較しました。ビオンはまた、Oというものを、私たちではイメージできない数学的な無限というもの、あるいは無限のなかの個々の無限というものと比較しています。ビオンにとっては、ビオンが重要と思ったものは、意識と無意識という特質よりも、有限か無限かという特質の方に重きを置きました。まずはこの話題について、ちょっとここで止めましょう。というのは、このことについてこれ以上ちょっと話すことはできません。最大限の受容と、それを妨げてしまう思考をまずは止めて、それを待たなくてはいけません。宗教ではなくて、言葉の外にある領域で起こるであろう、そこで起こった時に、ところがそこで掴むであろう、そういう治療的方法である、そのころ、信心というものを待たないといけません。ビオンがいつも思っているそのころ、つまり知、知性というか、これは何だろうか、考えるところから、不可知の、知

ることのできない領域に入っていくというのはできない。そうではなくて、その不可知の領域から浮かび上がってきたものが何なのかということ、私たちは見ていく必要があります。

ちょっとビオンから離れていきたいと思います。ビオンについて話すのではなくて、そこから同じことを言っているのだけれども、別の方にいきたいと思います。日本人のこちらの哲学に入っていきたいと思います。多分、皆さんの方がよく知っているでしょうから、皆さんが私を助けてくれるかもしれません。今まで私が喋ってきたことというのは、いつも禅というもの、日本の禅というものを思い起こさせます。ビオンはインド人としての背景を持っているのですけれども、禅には触れてはいませんでした。おそらく皆さんのほうが禅というものをよく知っているかもしれないし、あるいは皆さんがそのことを語ったり考えたりしなくても、皆さんの文化のなかに静かに存在しているのだと思っています。だから私が今から皆さんにお話するのは、外国から見たものです。だからもしかしたらだいぶ違うかもしれません。禅というのは中国のチャン、黄金の唐の時代のときに起こったものです。チャンは実際にはインド仏教と中国の道教とが融合したものです。その目的というものなのです。それは真人、真（まこと）との人（ひと）って書きますけども、真人、それを開放するということがあります。ビオンは、達成の人、*man of achievement* という風に使っている、これはキーツから引用しているものなのです。それは、実際には空（くう）、空虚っていうか、空（くう）からで偏在していて沈黙で、そして純粹で、内的な領域と接触しているものです。しかしながら主な障害というのは、常にイメージとかアイディアを形作っていかうとするところの機能ですが、一方でこの真人、真（まこと）の人というのは、全てのものに応答する空（くう）、空（から）っていう状態でそれと呼応しています。中国ではそれを、野生の猿という風に呼んでいるそうです。この中国のチャンというものは、実際には日本における禅という形で保たれていたわけです。日本の禅というのは、より神秘的で、实际的で、いわゆるこの解放というのが日常のなかの一部になっていて、例えばその生死をかけて戦う侍であったり、沢庵和尚であったり、あるいは千利休の茶道であったり、あるいは絵画とか和歌とかそういうものに現れています。この中国のチャン、あるいはその禅ですね、仏教の何千年もの年月のなかで、ここが活動を止めるということの、無・思考、考えない、ということが真の現実のある洞察の体験を結果として見出しました。人のところが思考から自由なときに、人の本性というのは、真の自由に到達すると言われていています。今ここで求めているものが、中国語で「无心」と言うそうですが、日本語でいうと「無心」ですね、西平直教授と松木邦裕教授が共著で論文にしているものがあって、ちょっと私今日持って来っていたのです。手元に持ってくるのを忘れてしまいましたが、この無心のところ、というものについて書いています。西平教授は教育として書いているそうです。その中で面白いことが書いてあって、そのデフォルトモード、ところ…動いてはいないのだけど、ところの中はすごく活動的になっているということですね。それは例えば、抑うつの場合にはそこが動いていない、ということがわかっています。この無心のところというものを、西平教授が言っているのは、一回壊すというのですかね、壊して、そして解放されてやってくるころのことなのです。一回壊すので、なんだけどまた戻ってきますから、これを、マインド・ノーマインド、無心のところと言っています。これが実際には、私たちセラピストにとっても大事な考え方かなと思っています。すごく興味深いのは、このところにくるまでに、本当に何千年もかかっているということですね。この無心のところに到達するために、いろんな技法を禅仏教徒の人たちは、開発というか探し

求めてきたわけです。例えば道元でいうと座禅であつたりとか、瞑想であつたりとか、あるいは叫ぶとか、打つとか、それからフウアンポーという方が考え出した不合理な公案というものであつたりという、そのものですね。これをエディプス神話とつなげてみると、エディプス神話の中に盲目のテレシアスというのがいるのです。それは受容とか欲しないとか欲望を求めないというところなのですが、それと矛盾します。この無心に到達することにおける解放というものは、しばしばすごく大きな疑惑、疑問というものの時期があつて、そのあとに思いもよらない瞬間に起こります。今の話から、今度は哲学の京都学派と、晩年のビオンの思想と技法というものにつなげていきたいと思います。

私自身がこの日本に來た望みのうちの一つというのは、このビオンの研究の中心となる、精神機能のこの力強いその不可知な領域の部分ですね、知ることのできない領域部分というものを、よりきちっと解明していきたいというものでした。そこから何千年以上も続く禅ということに、つながっていったわけです。この京都学派といわれる哲学者たち、西田幾多郎であつたり田邊元であつたり、和辻哲郎、西谷啓治、上田閑照、木村敏、そのほかいらっしゃいますけども、その人達は禅の哲学のこのことに関するのと、それから西洋のもの、特にそのなかでも現象学的な哲学ということと関連をつけていきました。私自身が西平教授と話していたときに、京都学派というのは、西洋で考えられているような、何々と同じような思想を持った学派で分かれている一つではなくて、一人ひとり個々人が、それぞれの関連を持っているということを聞きました。京都学派の最も有名な哲学者はもちろん西田幾多郎ですが、絶対無とか純粹経験という、明らかに禅からきている彼の思想で、彼は知られています。西谷がそれを翻訳しています。私はこの西谷が翻訳したものについて、それをビオンのアプローチとつながって、すごく有用で補足できるものじゃないかと思っているので、こちらのことについて考えていければと思います。西谷はその、空（そら）、エンプティネス、から、空っぽっていうことを、空（そら）、空っぽの空（そら）という風に理解し、それは全てを包含し、全てを超越するものという風に理解をしています。そこから引用していますけれども、それをちょっと皆さんにお伝えしたいと思います。空虚、空（から）ということですね。より高く広がっている空に例えられる。それは雲を超えて無限に広がって進んでいる。その上、それは誰も旅行者のいない不毛な荒地、鳥が飛んでいないすごく寒い王国、人間の感情がびったりくっつけるものを何も提供できるものはない。けれどそのような何も感じない、すごく寒い極寒の世界はまた、自由や解放を活気づける世界にもなる。この空（から）、空（くう）、emptiness は、新しい自己をも生み出します。いわゆる中国のリンチーのいつている、真人、真（まこと）の人ってことですね。このリンチーというのは、元來個人に起こったことというのは、個々人がブッダに到達するというような考え方をもたらしました。それはビオンとすごく似ているわけなのですが、この外の世界の純粹経験というのは、個人の解放と共にあつて、この外の世界と中の世界が共に変化していくというのがすごく面白いところです。ここでちょっと菩提達磨が言ったことを引用したいと思います。菩提達磨が言ったのは、あなたが自分のところで世界を知りたいと思ったときは、あなたはどちらも理解することができない。こころ無しで世界を理解しようとするときに、両方とも理解することができる。ここでいっていることは、無心のところだったら、全てのことを理解できるということで、こころと世界のことを理解できるということを言っていると思います。ここで大事だと思っているのは、ビオンの信仰、あるいは信心フェイスというものと、西谷の空（くう）、empty というものは、空（から）にするための

意志の行為、空（から）にしていくための行為ではなくて、受け身で、受容状態のところであり、直感だというのが非常に大事なところ。このビオンとその西谷教授を比較するなかで、晩年のビオンの考え方をよりわかりやすく、西谷教授がいつているというふうに私は思っています。彼は精神分析ではないです。考え方ですね。まず二人とも何から始まったかと言うと、そのころの印象ということから始まりました。それは英国経験主義者の哲学者によって記述されたものですね、このころの印象というものは。西谷教授が言っている、この空（くう）という考え方です。この二つの部屋、A と B とここに表していますが、この二つの部屋を例えにして彼は話しています。彼は本を書いています、『空虚と直接性』という本を書いています。まずこれ A と B とありますけども、これ真ん中の敷居で分かれています。この敷居ってのが A にも所属して B にも所属して、つまり両方ともに所属している。ここで、ともに共有しているというところで、そこにエンプティネスがある。このすぐこう接近している、くっついている、つまり主と客体とが分かれていないというところの、空（くう）というものです。これをドイツ語では Bild という言葉で言うのです。この Bild は実際に訳すと、「絵」という風に訳します。絵画の絵ですね。実際のその絵というイメージではないのですが。ただしこのドイツ語でいう絵というのは、写真のようなイメージとは違って、この絵というのは特徴であり、ものの本質という意味です。それは、ビオンがいつている、感覚のない、分析的な、非感覚的な分析的な対象という言葉があるのです。不可知のもの、それと同じものです。誰か患者の人と会ったときに、その人の本質の部分というものに触れることができるのだけでも、それは決して理由とか言葉とかではなくて、自分の中の直感で出会う、ということですね。現象学という、そのものを見るということです。そうではなくて、それが見られない、だけでも、何ですかね、言葉ではわからないけども、わかるものということですね。松木邦裕教授が、「名大工に樹が、こんなふうに切るべきだと伝えている」ということを言ってくれました。それから北斎富嶽百景で有名な北斎、皆さんよくご存知だと思いますけど、彼が次のように書いています。そこに書いているのを日本語で読みます。「6 歳あたりから、私は生活からスケッチをする—普段の生活の中からですね—という習慣があった。芸術家になって五十歳から評判を得るような作品を生み出すようになったけれど、70 歳までにしたのは、何も注意を向けられる価値のないものであった。73 歳になって、鳥や獣、昆虫、魚や植物の成長の仕方の構造を自分は掴み始めた。もし今後挑戦し続けたらば、86 歳までには、もう少しよく確実にこれを理解し、90 歳までには本質に届くだろう。100 歳で、実際にそのことに、神のような理解が自分にはできるようになって、130 歳か 140 歳以上になったときは、私が描く全ての小さな点も、線も、全てが生きているという段階に到達することだろう」という風に言っています、そして「永遠のいのちを与えてくれる天国があることが本当であるということを示す機会を、私にお与えくださいますように」という風に言っています。ビオンと西谷をちょっと比較してみますけれども、ビオンは、西谷のようにこのころの印象からスタートしたのですが、文化や言語にもともと備わっている、あるいは存在する、前概念というものがある、そこによって把握され見出されるものである。まず私自身が、自分の幼い息子との体験のなかでの話をしたいと思います。ここにありますが、こういう絵本を、自分の子供に何回も何回も見せていた。で、ある日の午後、彼と一緒に出かけに行ったときに、彼は今まで一度も本物の馬というのを見たことがない、この絵本の中でしか見たことがないのに、そこで馬がいて、“horse”「馬」って言った。これが私にと

って興味深かった。絵と本物っていうのは全く違うけれども、そこに何かつながりがあって、パターンがあって、もともと遺伝、DNA で持っているものもあるけれども、あるいは言葉とか文化のなかで、というものもあるけれども、このあたりを前概念っていう言葉でも言えると思っています。この前概念というものがあって、そして経験が必要で、そこから概念というものが、例えばまず一つ概念、コンセプションが生まれてくるということですね。まずは、赤ちゃんにとっては、おっぱいというものがすごく大事なわけで、それが必要なわけで、そこに出会って体験して、そこから概念が生まれてくるわけです。ビオンがいつている思考というもののなのです。思考というものは、そこにはないから生まれてくる。例えば赤ちゃんにとっては、おっぱいという概念が生まれてくるのは、そこに無いから、それをこう考えて、そして思考として生まれてくるわけですので。無いから、生まれてくるってことですね。これが知における変形というもののいい例です。でも O（オー）における変形というものにとっては、またちょっと違う。この O における変形というものに関しては、西谷のほうが上手に表現していると思います。西田にとってそれは正反対のことで、二つの部屋の彼の考え方においてその分離というものが無い、同時に、それはものであってもものでない、ということですね。この emptiness、空（くう）ということですね。これは分離ではないけれども、そこに存在することがないけれども、完全に存在しているというものです。これは理想的な核同士のこの接触のこの状況、これは精神分析や心理療法における対話です。この無分離、nonseparation ですね、分離の無しって書きます。この無分離というものは、哲学者の井筒によってかなり強く考えられてきています。彼はいかに、直接出合う、あるいは完全に見るというふうに言っていますが、ここでは、直接出合うということは、実のところ通常の見るといふことと対比すべき何かではない、という風に説明をしています。それは、A が B を見るといっている時でさえ、それはそこに存在をしていない。A も B もない、ということです。不変の対象でさえありません。それっていうのは主体と客体というのが存在しないわけです。それ自体を見るということができない目、あるいはそれを燃やすことができない火、というものがあります。完全な知覚であるこの体験においては自己、こころというものは死んでいて、そこには無、というものがあります。この状態においては、時空間というものもありません。そこから二次元のひとの時空間の表象に戻るときに、こころが変化するわけです。これが中国語では「无心」、日本語では「無心」といいます。こころが変化していった、この二次元の人間、あるいは真人、ビオンがいつている達成の人、man of achievement になるわけです。禅の仏教徒というのは、この理解は仏教において悟りというのかもしれませんが、この知覚状況の変化において、夢から醒めたようなものだといっています。無心のこころというのは、自己に続くのではなく、その空（くう）、空（から）に続いていくものです。このこころというのは、自然に異なったものになっていきます。自分本位ではなくて、自己、脱関心です。そして努力なく、つながりから自由になります。西谷はこの自由な想像を、自己中心のこころにおける暗い想像という風に対比させています。ビオンも、自由で瞑想的な想像について話しています。

今度は臨床例について話したいと思います。私たちがやろうとしていることは、 β 要素によって切り離されたトラウマ体験というものを、精神的なものと考えていき、コンテインしていくということです。臨床の場合においては、それをコンテインする、もの想いのなかでやっていくということをしています。ただそのもの想いとかメンタライジング、あなたの気持ちのことを理解するという形をとっていただけ

では十分ではなく、トラウマに対する効果というのは、別のレベル、心理療法で何が大切かというのは、私の声であったり、匂いであったり、厳密な面会とその枠であったり、絶対的な安全性のように思われました。そこに知ることのできる場所に線があって、その下がアンノワブルゾーン (unknowable zone) なんです。こちらの方で体験できる、体験したということがすごく大事になります。このことによって神経科学でも、この神経系のネットワークというものが、別の非言語領域とつながっているものが見つかっているのですが、リーバーマンが示したもので、X と C のシステムっていうのがそれぞれにあり、その間での違いをここで示しました。こちらの言葉なしで働く X システムというものがあります。こちらの方は、早く努力を要しなくて、それを説明できるようには覚えていられない、けれども感情や記憶のうちに、暗黙のうちに覚えているというものです。こちらの C システムの方は、言語表現に関係する方なので、システムはゆっくりと働き、例えば教科書を読むとかそういう形で記憶を入れていく、あるいは努力を要するものです。将棋のアマチュアとプロを比較する研究というのがあったのですが、それでアマチュアがどの程度よいかを尋ねられた時に、明るくなったところですね、それが C システム、つまり考える必要があった。しかしプロの方は、X システムの方が明るくなった。つまり彼らは思考の外側であることがわかっているということです。これは心理療法にとっては非常に大きな結果で、なぜかという、C システムで起こる言語による洞察というのは、早いけれども長く続かない。そして X システムで起こる、転移の中での体験による変化というのは、ゆっくりだけれども長く続くということ。今からお伝えしたいのは、例えば、最初にいった芸術作品、それが私たちの心を動かすわけですが、必ずしもそれをコピーしたものが、私たちのところを動かすわけではない。それが何かという、それが **world of the mind**、無心のこころの世界ということを話したいと思います。無心のこころの世界というものは、自由にまずは浮遊していて、それは不変ではなくて、空（から）で、そして物語でない、これは大事です。物語でなくて、それはそのものから出ていて、一生消えないで固定しているものだということです。マイスター・エックハルトは、動かない動く人について話しています。この別の世界というのは、芸術においては、子宮とか存在とかあるいはフェミニン、女性性というものと比較されています。けれどもまたそれに付随して夢中にさせる意味というものがあります。これを見てもらうと分かりますが、動かないけど動いているものがあります。これはその精神遅滞の患者さんが創られたアート、芸術ですが、何か、私たちの胸を打つものがあると思います。それは、その不可知の領域のことではないでしょうか。これは、こころの中から飛び出してきた、破って出てきたものです。例えばこれは書道ですね、お習字の大きく書くアートですが、これもやはり日本の精神遅滞の方がやられたものです。これはこころから何か突き破って出てきたこの感覚という。それが出ています。だから多くの芸術家というのは無心のこころから出現するものというのは、芸術に動かされたもののとき伝達してくるものなので、多くの芸術家は、自分のアートというのは、無から出てきたと言います。キーツが、もしその詩人が窓の前のスズメについて書きたいならば、彼がスズメになるべきだと言っています。これは有名な禅やその絵画とか詩にすごく近くて、密着していて、努力していなくて、というものです、西平が言っています。例えばこの鳥のように。北斎あるいはダヴィンチとか、天才的なものです。こう動いて出てきたものという感覚ですね。これがその本質というものです。これは北斎です。これは有名な写真家のリチャードのものですが、ここの中にも何か蠢いていて見えるものが見えると思います。多分、日本の文化というのは

それにかかなり近いものがあると思います。それを今からちょっと紹介したいと思います。これは東山魁夷の絵ですね。ただ単に現実を描いているというのではないですよ。何か私たちのこころを動かすものがあります。これは写真家の上田が撮ったものです。これは最近、京都であった美術のショーですね。あの舞踏のダンサー、ちょっと名前は忘れましたが、空（くう）というものがここにあると思う。この天才的な視点から見ているというのがわかると思います。辻本という写真家のものです。この世界に接触しようと思ったときに、禅に本当に通じるものが、もう何千年も受け継がれてきたものですね、につながると思います。竜安寺ですね。大徳寺。こういうきちっと決まった形があるわけじゃないのに、私たちに話しかけている。語りかけているものがある。これは屏風ですね、等伯の描いた屏風です。しかし、形式とか言語というものも別の機能を持っていて、この不可知の領域に対して、この形作っていくというものが大事で、この隠蔽ということは理解されない不可知な現在を作ることができると思っています。北山修も言っていますが、例えば女性の美というものを、そのままこう留めておくという、その「見ることの禁止」というもので話しています。天皇というのはすごく強大だけれども、やはり空（くう）、empty です。見られないし、人生の詳細を述べられることはない。例えば私たちのほんとに日常のことかというと、デパートというのは、隠蔽という機能がなかったら空っぽになってしまうでしょう。洋服であつたりとか化粧品であつたりとか、ファッションというものであつたり、この不可知なものを隠すということで存在しています。岡野憲一郎教授が、日本の文化において何かを陰に置いたままにすることを好むことを示しているわけです。例えばその世阿弥がいつている、「隠蔽されているものが花で、隠蔽されていないものが花であろうはずがない」ということを紹介しています。例えばこの「はうろ」ということですね、実はこの裏側に美が隠されている。彼の論文から取ってきたものです。

結論にいきたいと思います。このまず不可知の領域にいくときには、自分自身が特別な、ある種の状態でいる必要があります。まず一つ大事なのは、この直感ですね。核と核のこの出会いという部分です。これが私自身は、治療の変化の一番土台になるものだと思っています。そのような努力しなくて直感的な接触の強さというものを、顔の表情によって嘘を見破るという実験があるけれども、それを読んだときに十分に納得しました。この実験というのは、普通の統制群と、トレーニングされた FBI の職員と、それから瞑想を 1 万時間行った禅僧のグループの、3 つを比較しました。FBI の人はどういう顔の時に、嘘をついているかというトレーニングされています。禅の人たちは全くそういうことはありません。FBI のグループは、統制群よりも 3 倍も良く、嘘つきを当てました。それに対して禅僧の人たちは、別に焦点を当てているわけでもない。直感的な無心というものを土台にしているグループですが、6 倍ものいい結果となりました。だからここからわかることは、直感的でそして純粹に出会っているものが大事になるということがわかると思います。ここで終わりにしたいと思います。

第 2 部 指定討論

松下：最初に当センターのセンター長の岡野教授より指定討論のコメントをお願いいたします。

岡野：特に指定討論は、プログラムにはありませんでした。ベルモート先生のディスカッションで、書いて英文にしたものをお渡ししているので私は日本語でお話をさせていただきます。ベルモート先生、大変ありがとうございました。本当に奥深い話で、ハイレベルと言うか、ちゃんとしていたかちょっと自信がないので、復習をさせていただきます。

最初に、芸術と愛と治療における変化というお話でしたけども、これらの体験は無意識的で、非表象的なものであるというお話でした。つまり理論とか理屈でわかる問題ではないということです。これを聞いていて私は、右脳と左脳の働きの違いということを考えていました。みなさんご存知の通り右脳というのは直感的で感情的で、左脳は理論的・言語的なわけですね。私たちの脳はおそらくこれらの左右の脳をうまくバランスをとって使っているのではないかと思います。ここに集まっていらっしゃる皆さんは、おそらく私も含めてかなり理論的な、左脳的な活動に偏る傾向にあると思います。先ほどベルモート先生からお話がありましたけども、彼はおそらく右脳に頼っていたのではないかなという風に思います。ベルモート先生は右脳を用いた直感的な体験の重要性ということについておっしゃっていたのではないかなと考えると少しわかりやすいように思いました。ベルモート先生は、リーバーマンという人の X システムと C システムの説明がありましたけども、それとも関係しているような気がしました。あるいはデフォルトモードネットワークという話も出てきましたけども、要するに、体験を理論的にわかる部分と直感的にわかる部分とに大きく分けると二つあって、その直感の部分がいかに大事かというということとをずっとおっしゃっているという風に思いました。

次に先生がビオンの考えについて、お話になりました。考えが心に入る前の β 要素ですね、母親の α 機能によって α 要素、すなわち心の内容物となるというプロセスの話がありました。彼が強調したのは、この α 機能とは、母親などの養育者によって与えられるものであり。母親が赤ん坊の β 要素を何でも受け入れられる受容性を持っていられることが大事だということでした。非常に興味深いことに、先生はこれを脳のデフォルトモードネットワークに結びつけられました。この精神的な話と脳科学的な結びつきというのを非常に強調されておっしゃっているところも、先生のお話の魅力ではないかなと思いました。

その次のお話ですけれども、不可知の領域に入っていました。先生の核心部分、先生の講義の核心部分という感じでした。不可知の領域については多くの分析家がこの話題に興味をもってきたわけです。フロイトもウィニコットもそうだったわけです。フロイトは、夢は無意識内容をそのまま映し出すわけではないと、ですからある意味では、無意識内容というのはずっと不可知的であって、夢の内容というのは、顕在夢というのはすでに加工されているものだという風に言ったわけです。彼は、分析家は患者さんの話を自由連想の表面的なもの、あるいは言葉に囚われないようにという風に分析家である私たちに伝えました。これが自由連想です。ビオンの「記憶なく欲望なく」という考え方にも関連し、それがデフォルトモードネットワークという話に繋が

っているわけですね。で、なんでこういうデフォルトモードネットワークの話が出てきたかというと、先ほどベルモート先生のお話にもありましたが、ポカーンとしているときの脳というのは、実は一生懸命動いている。何もしていないようで実は大事なことをしている。じゃあそれをデフォルトモードネットワークと名付けて、それに対して、何かに集中してやっていると、課題を遂行しているときには脳の違った部分が働いていて、それが課題遂行ネットワーク。この二つの間を行ったり来たりしているのが人間の脳の働きであろうと。であると我々が授業なんかを聞いて、課題遂行をしているけど、ふわふわふわっとデフォルトモードに入ってしまう。実はその部分というのはすごく重要であって、その時にいろんな発想っていうのが湧くという理論があります。最後に先生は仏教や禅に触れられて、西田哲学の純粹体験や絶対夢のテーマに触れて、西洋哲学やビオンとの関係性に触れられました。ベルモート先生の講演は非常に味わい深くて、いろんな考えを私の中に掻き立てられました。

その中でちょっと一つ私の連想をお話ししたいと思います。私は彼がスターンの言う赤ん坊の無様式知覚、つまり、新生児が何かを体験するとき、知覚とか視覚とか触覚とかいろんなもので何かを味わって、触って、感じ取って。それを、いろんな知覚様式を超えて認識することについてスターンが言っているわけです。ですからこれは、inmodal というよりは transmodal、つまり様式横断的な知覚という意味だという風に私は認識しています。そもそも人間が物事を知るプロセスというのは、いわば元の部分には何もなかった、ゼロしかなかった、という風な考えに行きつくわけです。つまりゼロの部分から、赤ん坊は何の偏見もなく、歪曲もなく、体験していく。これがビオンの言う O（オー）というのに非常に近いような気がして聞いていました。赤ん坊は脳の中に少なくとも表象に関しては何も特定のニューラルネットワークを持っていない可能性があります。つまり赤ん坊はお母さんの顔を見るまでは、お母さんの表象に対応するようなネットワーク、脳の中のネットワークを持っていないわけですね。ですから赤ん坊は、最初の体験には何の先入観も記憶も欲望もないわけです。それでこそ学習は生であって、偽りのないもの。これを西田幾多郎の純粹体験と関連づけることもできるかもしれません。これは私がデフォルトモードネットワークを使っているときこういう発想が湧いてきたのです。(笑)。そうすると、最初にお母さんの顔を体験してネットワークが成立すると、それ以降の学習というのは最初のネットワークが広がっていくわけです。それに囚われることになるということですね。最初は白紙の状態から赤ん坊は何かを学ぶ。おそらく最初に学ぶのは自分の手だとかお母さんの顔だとかそういうものだと思います。それがネットワークを作ると、それは赤ん坊が理解することであって、囚われていくものだと思います。ですから、すべての赤ん坊の学習は最初に引かれた作図線によって導かれるけどもバイアスがかけられていくだろうと思います。その最初の作図線はお母さんに手伝ってもらって引かれたものかもしれない。あるいは、母国語の音を初めて聞いて初語を作るためのニューラルネットワーク、神経のネットワークかもしれません。彼は初めて学習したように学ぶことはできないわけです。つまり、最初に線が引かれてしまった、ちょうど母国語を覚えるとそれ以降に聞く外国語はみなそれによりバイアスがかけられてしまうのと同じようです。これはまあ一つの転移体験みたいな感じで。最初にお母さんのイメージという転移が生まれて、そうす

ると誰を見ても、最初のお母さんのイメージの別バージョンとして、いわば転移として体験されていくと言えらると思います。その意味で、ビオンの言う記憶なく欲望なくというのは、ちょうど赤ん坊のように物事を体験せよと言っているようにも、まあ、赤ちゃんが体験したように、あなたが一番初め生まれて最初に体験したように、物事を直接体験せよと言っているように思えるわけです。それはバイアスとか先入観のない生の体験となるわけです。しかしわたしたちは赤ん坊ではないわけですね。すでにある意味で汚れてしまっているわけです。するとすでに汚れた私たちがいかに赤ん坊のように世界に触れることができるのかという、すごく難しくておそらく不可能なテーマに向かっているのではないかと思います。でもそれこそがバイアスなく人を体験して物事を体験して感動を体験することができるということであって、そこにビオンの思索が始まったのではないかなという風に考えています。私たちはこの世に生まれ落ちて、すでに人間として成長したがために、ゼロから学ぶことができません。それでも純粹体験を赤ん坊のように持つためには再びゼロに戻っていくしかない。それは不可能ですね。そのために滝に打たれたりだとか、座禅を組んだりだとか、只管打坐など、その他、あるいは精神分析を受けるということも含まれると思います。それによって、マインドワンダリングの力を強化して、それは赤ん坊が一番初めに体験したものにちょっと近い形で物事をピュアに体験するということにつながるのかもしれない。ということ、指定討論というか、話題提供という形で。この原稿は先ほど先生にお渡ししたので、それについて先生がどのようなお答えというか反応をしていただけるかは全然わかりません。これがまあ一つだとすると、もう一つは、さっき何か質問があるかと聞かれました。それで私はこう言いました。ビオンに出会って、先生の体験はどのように変わったのですか？という質問がありますと。質問というかディスカッションですね。もう一つは、ベルモート先生が、これを話すとおそらく自分は永遠に話すだろう、って、さっき質問したらね（笑）。ビオンに会ってあなたの人生はどう変わったのですか、という質問をして、時間が余ったらいくらでもその時間を使ってそれを話していただけるかなという風に思っています。

ベルモート（通訳：ダーリンプル）：とても興味深いディスカッション、どうもありがとうございました。

ビオンがいつもはっきり言っていることは、私たちが心理療法家として患者さんに会う時には、毎回会うけれども、毎回初めて会うつもりで会いなさい、ということです。あともう一つとても興味深かったのが、岡野先生が、赤ちゃんというのが欲望を持っていなくて無心の心でいるという風に理解しているということです。ラカンが言っているのは、赤ちゃんとお母さんが関わりを持った時に、そこで言語、言葉っていうものが変わっていくということですね。言葉というものを使っていくと、直接の出会いとかっていうものが壊されていってしまう。そして直接出会うというものが、言語によって壊されてしまうので、何かを永遠に失ってしまうという風にラカンは言っています。それをラカンは **lack**、欠乏という風に言っています。普通、赤ちゃんが泣いたりしているのを見る者が、本当に何かを欲しているよね、という風に私たち思いがちです。そうではなくて、岡野先生は赤ちゃんが欲望、熱望ということがない、無心であるとおっしゃったのが私にとって興味深いです。

二つ目の質問の方で、なぜビオンに出会って、ビオンによってどんな風が変わったか。私がビオンに出会ったのは、最初に訓練を始めた時、精神病患者に出会ったところからです。その時に分析的トレーニングっていうものを受け始めた時に、私はありとあらゆる文献を探し始めました。その時にビオンと出会った。それは他の論文とは全然違っていました。その頃は精神病患者に関しては何も参考になるものが、ガイドになるようなものが何もなかった。それをビオンがすごくきちっと著していました。他の理論というのは、いろいろ説明している。精神病患者との体験というものにはすごく違って、逆にビオンはすごく難しい。体験という意味ではすごくそこにマッチしているものがありました。私はそのあとも精神障害を持った、あるいは心身症を持った、あるいは人格障害を持った人たちと関わってきました。例えばビオンは、劇作家ですかね、ベケットを分析したりとかしている。すごく異なったものをこうビオンに……ビオンとベケットがお互いに心地よいという状態を作ったっていうことですね。ベケットもビオンも二人とも言語に対してとても難しいものを持っていたという、ある意味孤独な人たちでした。ベケットを私は書いている、なぜならその書くということに入り込むっていうことができないからだ。ビオンは、私の論文とかを皆さん読んでいて、分からないかもしれないけれども、何回も何回もどうぞ読みなさいと言いました。実際に患者と会うということのために書いているという感じです。患者さんと関わってそしてそれを読む、関わって読む、そういった両方の相互作用、相乗効果です。そんな感じです。ずっと私しゃべりだすと止まらなくなるので、そろそろフロアの人たちとディスカッションに持っていきたいと思います。

質疑応答

松下: とても刺激的なディスカッションだと思います。いろいろ賦活されたものがあるかなと思います。

どなたか、ご質問、ご意見、感想、感じられたことなど発言いただければと思います。せっかくの機会ですので、もしよろしければ、挙手をお願いします。ご発言の前にご所属とお名前をお願いします。

フロア1: クリニック勤務です。すごく興味深く聞かせていただきました。先生が言われていることっていうのは後期ビオンにおける **becoming O** がすごく中心のお話だったかなと思います。**becoming O**、**O** になるということについて、岡野先生は赤ん坊の心でと言われていたと思いますし、キーツの言葉を紹介したところで、スズメについて読むときにスズメそのものにならないといけない、っていうような言葉があったということで、いろんなイメージを説明していただいたように思います。ただ、臨床場面で **O** になるということがどういう体験なのかということが、なかなかこの言葉を超えたものだということなので説明が難しいと思います。もし先生が臨床体験の中で、これが **becoming O** と思うような瞬間、そういう具体的な体験があれば聞かせていただけたらなあと思いました。

ベルモート (通訳: ダーリンプル): まずとても大事な質問ありがとうございました。一言でいうと、言語で表せるものの外にある機能というものに直感的に出会うということです。問題はこれをどうい

う風に言うかということです。まず、とても一番大事なのは、自分自身が、**emptiness**、空の状態である、ということがすごく大事。ビオンが言っているのは、これを自分自身が学んでいかねばならない。例えばビオンは具体的に、時間を考えるとか、自分が空になろうとするのだ、とかいう風に言っています。これを学んでいく、**learn**、体験という風にも言います。学んでいくことが必要ということです。この空ということですが、空っぽ、**emptiness** と、西平も言っています、逆説的にこれは存在するということと変わらないということですね。もう少しちょっと言ってみますと、例えば、**fisherman**、漁師ですね、漁師なんかを受容の状態にいる、とにかくいろんな状況に対して自分が受け入れる状態にいるということが大事です。私たち、こちら側がオープンでいつでもそれを受け入れるという状態である時に、私たちではなくて患者の方に起こることですね。それは患者にとって新しい体験になるわけです。それを私たちが見られるかどうかということです。論理的に見ようとする見えなくなってしまうので、そうではないところを見ていく、ということです。いろんな論文なんかを書いてあるものがあって、1 分で説明するのは難しい。この瞬間ですね、その時、私と患者さんとの間で起こっているものがあって、その患者さんが体験しているものというのはもしかしたらそんなにクリアなものではないかもしれないけれども、でもその人のそのあとの生涯にすごく大きなものを与える、そういうものです。例えば私自身が体験した例で行くと、**PTSD** の患者さんが、一生懸命いろんなことを思い出そうとして、いろいろ色々話していく。私はできるだけ自分自身がそこにともにいるということをしていました。その中で彼女が、どんどんイライラしてきて、不安がたまってきて。ある日彼女がすごい痛みというものを感じて、そしてその夢を見ました。その夢というのが、2 本の電線の両方がピュッとぶつかってショートするというような夢です。その時に、それがすごく彼女の心に影響を及ぼしたってことです。大事なのは、そういうことに自分がちゃんとオープンでいられること、この新しい体験というものにオープンでいられてちゃんとそれを見ることができるとということがすごく大事なんじゃないかと思います。

松下：早いもので時間が参りました。心理療法の本質についてお話しいただいたと思います。我々が生きること、存在すること、関係の本質に繋がる。今回は特に日本人の、我々の **origin** と、それを超えての人間の **origin** というところにも繋がるような面白い講義だったと思います。みなさんも色々なことをもっとお聞きになりたいといった心の動きがあると思います。心に受け取ったものを大事にしながら生きていければと思います（笑）。改めてベルモート先生とダーリンプル先生、ありがとうございました。（拍手）